

# 復活！－立花宗茂柳川再封400年－

柳川古文書館館長 田淵義樹



立花宗茂再封後の領地を描いた「御領内絵図」(渡辺家史料・柳川古文書館所蔵)

柳川古文書館は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため2月末から休館していましたが、5月19日から展示室のみ開館しました。休館中は、これまでどおり、収集した古文書などの整理や再開後の企画展・特別展に向けて地道に準備をしていました。

さて今年2020年は、関ヶ原の戦い(1600年)後に柳川を離れた立花宗茂が、再び柳川城主として復活した元和6(1620)年から数えて、400年目の節目の年です。この柳川再封が決まったのは、元和6年11月27日。そして翌元和7年2月25日、宗茂は約20年ぶりに柳川城へと入りました。今年は、この柳川再封400年を記念して、12月から来年1月にかけて特別展を開催する予定です。

元和6年、筑後一国を支配していた田中家の改易により、北筑後が有馬豊氏、南筑後(山門郡と上妻郡・下妻郡・三潞郡・三池郡の一部)が立花宗茂、三池郡の一部が宗茂の弟直次の子、立花種次に与えられます。実は、この段階で境界は確定しておらず、翌元和7年2月ころに、上妻郡では矢部川がその境とされます(「上妻郡割定之事」立花家文書)。しかし、

実際には川を越えて田畑を持っている人たちがいたため、耕作の実態が重視されて、川の両側にそれぞれの飛び地が発生したようです。また、このような飛び地は、蒲池地区や昭代地区、みやま市の本郷地区や長田地区などにもありました。

ところで、立花宗茂の領地には変遷があります。もともと宗茂が天正15(1587)年に豊臣秀吉から与えられたのは三潞郡、山門郡、下妻三郡で石高は9万887石余。三潞郡は全郡が与えられたので、現在の久留米市の一部も立花領でした。その後文禄4(1595)年に筑後国で検地があり、立花領は南へスライドし、三池郡の一部が入り、三潞郡の広川以北が立花領から外れます。この時、石高は13万2000石余となります。そして宗茂再封後は、石高10万9000石余でその領域は、「御領内絵図」(渡辺家史料)に詳しく描かれています。このような変遷のため、例えば市内でも矢加部、金納、蒲生、立石、高島は再封後に有馬領となりました。

立花宗茂の柳川復活400年を記念する特別展開催のころには、新型コロナウイルス感染拡大以前の平穏な生活が「復活」していることを願っています。

# 立花宗茂 と闇千代 ドラマプロット

－こんな大河ドラマが見てみたい－

第24話

■文=小山田桐子/憐D&N ■イラスト=大久保ヤマト

※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。

【問】市観光課観光推進係 (☎77・8563)

## 第4章

# 奇跡の復活劇、立花宗茂という武将がいた！⑤

宗茂、苦勞を共にした家臣らと新しい領地・陸奥棚倉に赴く

新しい領地・陸奥棚倉に、

家臣たちと共に赴く宗茂。

老齢の由布雪下には厳しい

距離だろうと、宗茂は江戸で

の留守番を命じるが、由布は

ついていくと言って譲らない。

道中、足をくじいた由布を、

宗茂は自ら負ぶう。由布は歩

けると言い張るが、宗茂は下

ろそうとしない。観念して大

人しくなった由布に、宗茂は

小さい頃の思い出話をする。

「足に刺さったとげを抜い

てほしいと頼んだのに、お前

は逆に押し込んだのだぞ」

「甘ったれた子供には当然

の仕打ちです」

恨みがましい口調で責めら

れ、由布は澄まして答える。

「なぜ道雪殿が宗茂様を選ん

だのか、今ならよくわかりま

す」とぼつりとつぶやく由布。

それは小言ばかりの由布が、

宗茂を道雪の後継者として認

めた初めての言葉だった。

宗茂はその後もすっかり軽

くなってしまった由布の体を

背負い続ける。

大名復帰のわずか3年後、

小野和泉が肥後で亡くなる。

小野を誰よりも信頼していた

由布は目に見えて弱り、臥せ

りがちとなる。そして、小野

のあとを追うように、その3

年後、奥州で亡くなる。

立花双翼を失った宗茂は、

誰よりも尽くしてくれた彼ら

に、再び柳川の地を踏ませて

やれなかったことを深く悲し

むのだった。

二代目将軍を任せるに

足る人物が否か

宗茂、家康の庄田面接を受ける

豊臣家に融和的な態度を見

せていた家康。しかし、次第

に豊臣家を滅ぼすべく画策を

始める。豊臣家が再建した寺

に徳川家を呪詛する意図あり

といちやもんをつけた家康は、

豊臣家との戦に備え始める。

### ～人物紹介～

宗茂と共に生きた有名武将たち⑤

島津義弘 (1535～1619)



宗茂にとって、仇から盟友となった武将。宗茂から父親のように慕われる。

鬼将軍のような見た目ながら、猫と奥さんが大好き。関ヶ原の戦いの後、宗茂と遭遇し、仇として討たれる覚悟をするが、宗茂は逆に寡兵の義弘を護衛。宗茂の人柄、スター性にほれ込む。

突然、家康に呼び出された

宗茂。彼は家康から、豊臣家、

徳川家をどう思っているの

か、厳しく追及される。

宗茂は道雪の養子になる

際、父から刀を手渡された話

をする。「親であっても敵同

士であれば、ためらわず斬れ」

その教えは、かつての敵同士

であっても、味方となればこ

の刀で守るようという教え

でもあるはずと宗茂は語る。

加藤清正や島津義弘も一度は敵同士だったが、助け合う仲間となった。

「柳川領を失い、恩もしがら

みもきれいさっぱりなくなり

ました。今、私の刀は徳川家

を守るためのものです」

しかめっ面で宗茂の言い分

を聞いた家康。納得していない

ように見えたが、後日、正信を

通じ、軍事参謀として、大坂の

役で秀忠を支えるよう命じる。